

第2章 いじめの未然防止

1 学級づくり、集団づくり（高等学校編）

1 「集合」から「集団」へ

新学期、期待と不安が入り交じる中、生徒がホームルームに「集合」する。とりわけ新入生の中には、ほとんど知らない人ばかりの環境に相当のストレスを感じることもあろう。

この集合状態をいかに生徒にとって安心かつ機能的な「集団」にしていくかが、いじめの未然防止において重要となる。さらに、生活環境の変化を踏まえ、高等学校でも、人間関係づくりのスキル獲得やトレーニングの機会を、意図的・計画的に提供していくことが重要である。

2 集団づくり（学級づくり）における大切な視点

集合状態にいる生徒がまず不安と覚えることは、①関わり合いをもてるか、②自分のことを受け入れてもらえるか、③自分は何をしたらよいのか、ということである。この不安をできるだけ早く解消させるため、次の3点に取り組む。

(1) 人間関係づくりの機会を設定する

ア 出会いの日から早い段階で関わる機会を設定する

特に新入生には、出会いの日からできるだけ早い段階で、周囲の生徒と話す機会を設定できるとよい。「また明日ね」「明日からよろしく」といった入学に伴う不安解消につながる言葉がけができればなおよい。短時間で出来るアイスブレイキングの実施も念頭に、触れ合いの時間の捻出を心がけたい。

イ 自己紹介は「相手に受け入れてもらえた」と実感できる機会にする

新学期早々のホームルームで自己紹介を実施することが多い。単に全員の前で氏名や出身中学校名を話すだけで終わるのではなく、「友達になれそうな人がいた」「自分のことを受け入れてもらえた」と実感できる大切な機会として重視したい。

【活動例】

①導入（5分）：アイスブレイキング 「バースデーチェーン」

- ・誕生日の早い順に輪になって並ぶ。（無言でジェスチャーを用いて確認し合う）
- ・輪ができれば、答え合わせをする。（順番に月日を言ってもらう）

ポイント 正しい順番になっていたら全員でハイタッチ、同月日の生徒同士で握手するなど、全体の雰囲気盛り上げる。

②展開1（15分）：グループで自己紹介

- ・バースデーチェーンを生かしてグループ分けをし、グループごとに席に着く。
- ・誕生日の早い順に自己紹介を行う。（名前・出身中学校・趣味・一言など）

ポイント グループメンバーの自己紹介を聞くときは、笑顔と相槌を。

- ・自己紹介を踏まえてお互いの理解を質問で深め、他己紹介ができる準備をする。

ポイント グループメンバーの魅力を引き出そうとすることで、お互いのよさを共有する雰囲気を醸成する。

③展開2（30分）：グループごとにメンバーの他己紹介を行う。

「私は〇〇といます。よろしくお願いします。さて、私は、A中学校出身の□□さんを紹介します。□□さんは中学校でバスケット部に所属し、毎日欠かさず朝練を頑張ってきたそうです。高校では新しい部活にチャレンジしたいとのことなので、放課後の部活動見学で見かけたら声をかけてみてください。」

④活動後の振り返り：活動を通してよかったことを、周囲の人と話してみる。

(2) 他者との関わり方を学び、集団の力を育む

インターネット空間のコミュニケーションに馴染んでいる多くの生徒が、現実空間のコミュニケーションに苦手意識や困難を感じている。このような状況の中で、対人関係スキルの獲得に向けた取組や、互いに思いやり、支え合う集団の育成活動を高等学校でも積極的に実施することが求められる。具体的な取組例を次に紹介する。

ア SEL (Social and Emotional Learning 社会性と情動の学習)

表情や仕草から「相手がどのような気持ちなのか」を推測するなど、他者を理解する力を育む。現実空間の対人スキルの獲得に繋がるとともに、顔の見えないインターネット空間のコミュニケーションの難しさや怖さを伝えることもできる。

【活動例】表情・態度から相手を理解する (10分)

①導入 (3分) : 情報の提示

様々な様子の写真を基に、「この人は今どのような気持ちなのか」を具体的に考える。

②展開 (5分) : 理解の共有

写真の人にどう接してあげたいか、どう振る舞えばよいか、グループで意見交換する。

③まとめ (2分) : 振り返り

活動を通して感じた自分の変化をまとめる。

【提示する写真の例】

- ・悔しそうな顔や姿
- ・泣きそうな顔や姿
- ・ショックを受けたような顔や姿
- ・無表情の顔
- ・うつむいて歩く後ろ姿

イ グループワーク・トレーニング

自分の情報と他者の情報を正確に伝達・理解し、その集められた情報を皆で協力してまとめることで、集団の中で役割を果たすことの達成感や自己有用感が得られ、協力することの大切さを学ぶことができる。

【活動例】「先生ばかりが住んでいるマンション」

①準備 : 5～6人のグループを作る。

②導入 : 取組内容の説明 (5分)

- ・マンションの図を配付し、課題を読み上げる。

「先生ばかりが住んでいる3階建てのマンションがあります。どの部屋にどの先生が住んでいるかを考えます。これから配るカードをもとに、みんなで話し合っ、図に先生の名前を書き入れましょう。」

- ・次のように説明し、<情報カード>を配付する。【次ページ参考】

「これから配るカードは、トランプのように切ってみんなに全部配ってください。カードに書かれていることは、自分の口で他の人に正しく伝えるようにしてください。他の人に見せたり、取り替えたりしてはいけません。また、他のグループの人とは話さないでください。」(質問があったら受ける)

③展開 : グループ活動 (20分) → 終了後、正解の図を配付する。【次ページ参考】

ポイント : 自分が発言することが課題解決の突破口になることを実感できる。
: 声を掛け合うことや傾聴することの大切さに気づくことができる。

④まとめ : 振り返りシートの記入とグループ内発表 (5分)

「今日の活動で自分が果たした役割や自分自身の変化を記入してください。」

「それぞれのグループで、誰がどんなことをしたことが課題解決のために役立ったか、発表し合ひましょう。」

* 『改訂 学校グループワーク・トレーニング』(坂野公信監修、遊戯社) より

1. 近藤先生は、1階の一番はじに住んでいる。	2. 中森先生の両どなりには、近藤先生、武田先生が住んでいる。	3. 大竹先生は、エレベーターの左どなりに住んでいる。
4. 小森先生、安村先生、武田先生の部屋は、ななめに一直線に並んでいる。	5. 南野先生と北野先生は、エレベーターをはさんで、となり同士である。	6. 田原先生と小森先生は、同じ階に住んでいる。
7. 北野先生の部屋は、渡辺先生と田原先生の部屋に上下ではさまれている。	8. 松田先生の右ななめ上に、宮尾先生が住んでいる。	9. 中森先生の1つ上に安村先生が住んでいる。
10. 宮尾先生と大竹先生は、となり同士である。	11. 南野先生は、松田先生の2つ右に住んでいる。	12. 小森先生と松田先生と近藤先生は、同じ列に住んでいる。
13. 松田先生は、エレベーターから一番はなれた場所に住んでいる。	14. 田原先生は、近藤先生の部屋から離れた部屋に住んでいる。	

マンションの図 <正解>

小森先生	宮尾先生	大竹先生	エレベーター	田原先生
松田先生	安村先生	南野先生		北野先生
近藤先生	中森先生	武田先生		渡辺先生

(3) 集団の「目標」「規範」を設定し、個々の「役割」を明確化 ～PBISを参考に～

PBIS (Positive Behavioral Interventions Supports ポジティブな行動介入と支援) は、アメリカで開発された行動理論に基づく支援方法である。望ましい行動を先に提示することで、自分はどのような行動をとればよいかが明確化になり、その行動を互いに認め合うことで、結果的に集団全体の雰囲気よくなるという考えである。いじめ等の問題行動の未然防止において効果的であるとともに、自分の行動が誰かの役に立っていることを実感できることで自己有用感を高めることにもつながる。

【活動例】

- 各学期の最初に学級の行動目標を決める。
例：「仲間を大切に」 「環境を美しく」 「時間を大切に」
- 学級の行動目標に基づいて、個人の行動目標を具体的に決める。
Aさん：①毎朝学級であいさつをする ②換気の窓開けを率先して行う
③授業開始3分前には席に座る
Bさん：①休んだ人に授業ノートを見せる ②掃除で隅々まで水拭きする
③朝の時間は30分読書に充てる
- 定期的に行動目標を振り返る。(用紙に記入)
自己評価を記入するとともに、最近見かけた「仲間のよい行動」も記入する。

このように望ましい行動を積み重ねていくと同時に、生徒の規範意識を育てることも重要である。時に教師が生徒に「これはダメ」と毅然とした態度で指導し、「正義の空間」をつくり出すことも忘れてはならない。

3 問題の発生に備えて

(1) 定期的な評価で変化を把握し、手立てを講じる

ア アンケート調査やQ-Uの活用

生徒個々の特性や学級生活の満足度に加え、学級集団の状態を把握する手段として有効である。調査の実施については、少なくとも年間2回は実施して個や集団の変容を確認し、関係教師と情報共有しながら適切な指導を検討する。

なお、調査により学級集団の在り方に関わる諸問題や課題が明らかになった場合、それが生徒が解決するのに適切なものであれば、生徒による自主的・自治的な取組を組織するようにする。生徒による問題解決力を育てたい。

イ 個人面談の実施

教師は傾聴の姿勢を基本に、多くの情報を生徒から引き出すよう心がける。面談時間中に全ての悩みを解決する必要はないが、「学級に居場所がない」などの対人関係の悩み等においては、スクールカウンセラー等とも連携して、適切な期間内で生徒に指導・支援する。生徒同士の支え合いの雰囲気大切にしながら、関係教師で情報共有して当該生徒を見守るという姿勢も大切にしたい。

(2) 小さな問題でも抱え込まない

集団にはトラブルはつきものである。そのレベルが小さいうちに周囲の教師に悩みを打ち明けたり、管理職の助言を得たりすることで、早期の問題解決につながるケースが多い。

- 人間関係づくりの機会を積極的に生徒へ提供し、対人関係スキルの獲得や集団の望ましい変容を促す活動を展開することで、学級のよい雰囲気を醸成することができる。
- 望ましい行動目標を集団で共有し、生徒がその役割を果たすとともにお互い認め合うことで、自己有用感に満ちたいじめの起きにくい学級にすることができる。

*参考文献

- 『マルチレベルアプローチMLA だれもが行きたくなる学校づくり』 栗原慎二編著 ほんの森出版
- 『改訂 学校グループワーク・トレーニング』 坂野公信監修 横浜市学校GWT研究会著 遊戯社
- 『月刊生徒指導』2017年8月1日発行 学事出版
- 『月刊生徒指導』2015年4月1日発行 学事出版
- 『生徒指導リーフ 特別活動と生徒指導』文部科学省国立教育政策研究所 生徒指導・進路指導研究センター編集
- 『生徒指導リーフ 「絆づくり」と「居場所づくり」』 文部科学省国立教育政策研究所 生徒指導・進路指導研究センター編集
- 『平成20年度研究紀要第22号』 川崎市総合教育センター
- 『PBI S実践マニュアル&実践集』 栗原慎二編著 ほんの森出版
- 『クラス担任のためのキャリアガイダンス vol. 41』 リクルート

第2章 いじめの未然防止

2 「分かる授業」を通して（小学校編）～対話的な学び、自己有用感を促す授業づくり～

1 授業を通じた学級づくり

児童にとって、学校生活の大半は授業である。一人一人が活躍する授業を行えば、児童は達成感・充実感をもち、一人一人の「居場所づくり」につながる。また、児童が相互に関わり、互いに認め合い、高め合う授業を行えば、児童同士の「絆づくり」につながる。日々の授業の中で、いじめを生まない風土が培われていく。

「勉強が分からない、つまらない」と感じる児童は、主体的に学校生活を送ろうとする意欲を失いがちになり、問題行動を生む一因にもなっている。小学校段階では、学習規律を示し、基本的な学習態度を身に付けさせることも大切であるが、何よりも「学習する楽しさ」、「友達と学ぶ楽しさ」を、授業の中で体験的に感じさせることが大切である。

2 「分かる授業」づくり

全ての児童が参加し、活躍できる授業は、学力向上はもちろん、いじめの未然防止にもつながる。そのためには、生徒指導の3つの機能を重視した取組を基盤とし、グループ活動等の多様な学習形態を取り入れたり、他者と関わる言語活動を工夫したりして指導に当たることが大切である。

生徒指導の3機能を重視した「分かる授業」

①自己決定の場を与えるために

- ・課題設定の工夫 ・学習形態の工夫
- ・発表の場の設定 など

②自己有用感を育むために

- ・発言の機会を増やす ・個に応じた言葉掛け
- ・一人学びの場を設定する など

③共感的人間関係を育成するために

- ・話の聞き方の徹底 ・友達のよさを見付ける
- ・間違った応答でも笑わない など

3 授業展開の例 ～5年 算数科「体積」～

(1) ねらい

○複合図形の体積の求め方を考える活動を通して、分けたり、補ったりすれば直方体の求積公式が使えることに気付き、正しく体積を求めることができる。

(2) 展開

学習活動	指導上の留意点
1 前時までの復習をする。 ・既習の課題について、直方体の体積を求める。	・これまでの学習内容を掲示し、自力で課題を解く手掛かりにする。 【②自己有用感を育む】
2 課題をつかむ。 ◎直方体でない立体の体積はどのように求めればよいか。 ・体積の求め方を、隣の人と確認する。	・児童のつぶやきを拾い、前時までの学習との違いを確認した上で、課題を提示する。 【②自己有用感を育む】 ・自分の考えをペアの相手に説明させる。 【①自己決定の場を与える】

